

## 子宮がん検診（車検診）

### 動 向

検診車による子宮がん検診は、昭和43年度から神奈川県の委託事業として開始され、昭和47年度から横浜市より委託が加入された。また、老人保健法試行に伴い、昭和58年度から実施主体が神奈川県より市町村に移行し、今日に至っている。

検診内容は、診察・子宮頸部からの細胞採取であり、横浜市立大学、日本医科大学、北里大学、東海大学、聖マリアンナ医科大学の各医学部産婦人科医師が担当し、当協会では細胞診断と検査成績の作成・通知・追跡管理等を行っている。

検診の内容、ならびに精度管理については、「子宮がん車集団検診実施検討会」(構成メンバーは上記各大学及び県立がんセンター、事務局は当協会)において検討されている。

### 結 果

2004年度の車検診受診者数は34,999名(初診33%)、50歳未満の若年層(39%)、50歳以上の高齢層(61%)の割合、年齢階級別では、60歳代が最も多く、次いで50歳代、30歳代の順である。年齢階級別の初診の割合は、29歳以下97%、30歳代64%に高く、40歳代39%、50歳代25%、60歳以上15%と加齢と共に低くなる。要精検率0.42%、要再検率0.35%、両者合わせた要再精検率は0.77%である。発見されたがんは28例で、子宮頸がん25例(扁平上皮がん)、子宮体がん2例、卵巣がん1例からなる。

がん発見率は0.08%、初診に高く(0.14%)、若年層に高く(0.13%)、年齢階級別では、39歳以下0.14%と高く、40歳代0.11%、50歳代0.05%、60歳以上0.04%と加齢と共に低下する。早期がん(0期、1a期)が、頸がん25例中23例(92%)と、高率に検出されたことは、車検診の絶大な効果であり、当該症例の方々にとっては子宮温存が可能となり、“Quality of life”を可能にしたことになる。発見された異形成71例(軽度33例、中等度21例、高度17例)である。異形成発見率は0.20%、初診に高く(0.39%)、若年層に高く(0.40%)、年齢階級別では、39歳以下0.51%と最も高く、40歳代0.22%、50

歳代0.09%、60歳以上0.06%と加齢と共に低下する。クラスⅡ再検は、要精検ではないが精検不要にもどすことの出来ない判定保留群であり、本来のクラス分類ではないので、感度、特異度など精度管理総合評価の表現には利用できないが、頸がん0期2例、体がんⅠ期1例、異形成9例(軽度7例、中等度1例、高度1例)を、誤陰性にせず検出できたことは大きな評価となる。2例の体がんは、1例が61歳、無症状、頸部細胞診クラスⅡ再検から、1例が63歳、無症状、クラスⅤから、共に早期がん(Ⅰ期)として検出された。1例の卵巣がんは、53歳、無症状で、クラスⅢbから検出された。

本年度の子宮頸部細胞診精度管理総合評価(病変有無追跡確定率81%)は、感度100%、特異度99%、正診率99%、陽性的中率73%と適正でありました。

### ま と め

子宮がん検診(車検診)の子宮頸がん、異形成発見率は、初診に極めて高く、年齢階級では、初診の多い39歳以下に極めて高い。県民の健康を守ることを目的に、我々は、“如何にして、初診、若年層両者の受診者数を増加させることができるか?”という課題に重点をおかなければならない。

関係の集計表は83頁に掲載